

3. 鳥類調査

鳥類調査は、春季を平成22年5月27日、夏季を平成22年8月10日、秋季を平成22年9月7日、冬季を平成23年1月20日に実施した。

鳥類の確認種一覧と個体数、確認位置図を表2-3-1、図2-3-1～2-3-4に、各季の確認個体数等詳細結果を資料4-1に示す。

平成22年度には、四季を通じて8目21科55種の鳥類が確認された。

表2-3-1 鳥類の確認種一覧表

No.	目名	科名	種名	渡り区分	平成22年度				貴重種選定基準	
					春季(5月)	夏季(8月)	秋季(9月)	冬季(1月)	環境省RL	三重県RDB
1	カイツブリ	カイツブリ	カイツブリ	留鳥				1		
2	ペリカン	ウ	カワウ	留鳥	29	21	43	2		
3	コウノトリ	サギ	ゴイサギ	留鳥	1					
4			ササゴイ	夏鳥	1		1			VU
5			ダイサギ	留鳥		7	7	1		
6			コサギ	留鳥	1	2	6	4		
7			アオサギ	留鳥	1	3	2	1		
8	カモ	カモ	マガモ	冬鳥				17		
9			カルガモ	留鳥	6	4	6	69		
10			コガモ	冬鳥				52		
11			ヒドリガモ	冬鳥				37		
12			オナガガモ	冬鳥				69		
13			ハシビロガモ	冬鳥				8		
14			ホシハジロ	冬鳥				20		
15			キンクロハジロ	冬鳥				6		
16	タカ	タカ	ミサゴ	留鳥			1	2		EN(繁殖) VU(越冬)
17			ノスリ	冬鳥				1		
18	チドリ	チドリ	イカルチドリ	留鳥	1			2		VU
19			シロチドリ	留鳥	7					EN
20			メダイチドリ	旅鳥			3			
21		シギ	トウネン	旅鳥			10			
22			オバシギ	旅鳥			1			
23			ミコシギ	冬鳥			1			NT
24			キアシシギ	旅鳥	2	3	1			
25			イソシギ	留鳥	○*	4	6	5		
26			ソリハシシギ	旅鳥			4			
27			チュウシャクシギ	旅鳥	○*	1	1			
28		カモメ	ユリカモメ	冬鳥				1009		
29			セグロカモメ	冬鳥				14		
30			オオセグロカモメ	冬鳥			2	2		
31			カモメ	冬鳥				91		
32			ウミネコ	留鳥	1	1318	1200	7		
33			コアジサシ	夏鳥	1				VU	EN
34	ハト	ハト	ドバト	留鳥	2	1				
35			キジバト	留鳥	2	1	1	2		
36			アオバト	留鳥			4			
37	スズメ	ヒバリ	ヒバリ	留鳥	1			1		
38		ツバメ	ツバメ	夏鳥	2	11	1			
39		セキレイ	ハクセキレイ	留鳥	4	4	6	4		
40			セグロセキレイ	留鳥	1	3	3			
41		ヒヨドリ	ヒヨドリ	留鳥	2		4	13		
42		ツグミ	ジョウビタキ	冬鳥				1		
43			ツグミ	冬鳥				6		
44		ウグイス	ウグイス	留鳥				1		
45			オオヨシキリ	夏鳥	1					NT
46			セッカ	留鳥	2	1	2			
47		シジュウカラ	シジュウカラ	留鳥				2		
48		ホオジロ	ホオジロ	留鳥				3		
49			アオジ	冬鳥				1		
50			オオジュリン	冬鳥				3		
51		アトリ	カラヒワ	留鳥		3	1	8		
52		ハタオリドリ	スズメ	留鳥	8	3	7	8		
53		ムクドリ	ムクドリ	留鳥	4	32	2	1		
54		カラス	ハシボソガラス	留鳥	43	86	47	15		
55			ハシブトガラス	留鳥				1		
合計 8目21科55種				種数	25	19	29	37	1種	7種
				個体数	123	1508	1374	1489		

注1) 種名及び配列は「日本鳥類目録改定第6版」(2000年、日本鳥学会)に準拠した。

注2) 渡り区分は、一般生態の他、現地調査時の状況により区分した。

注3) 「環境省RL」及び「三重県RDB」は、「環境省レッドリスト 鳥類」(環境省2006年)<<http://www.env.go.jp/press/press.php?serial=7849>>及び「三重県レッドデータブック 2005 動物」(三重県、2006年)を示す。

EN: 絶滅危惧 I B類

VU: 絶滅危惧 II類

NT: 準絶滅危惧

注4) *は調査では確認できなかったが、5月18日の現地の事前踏査時に確認した種を示す。

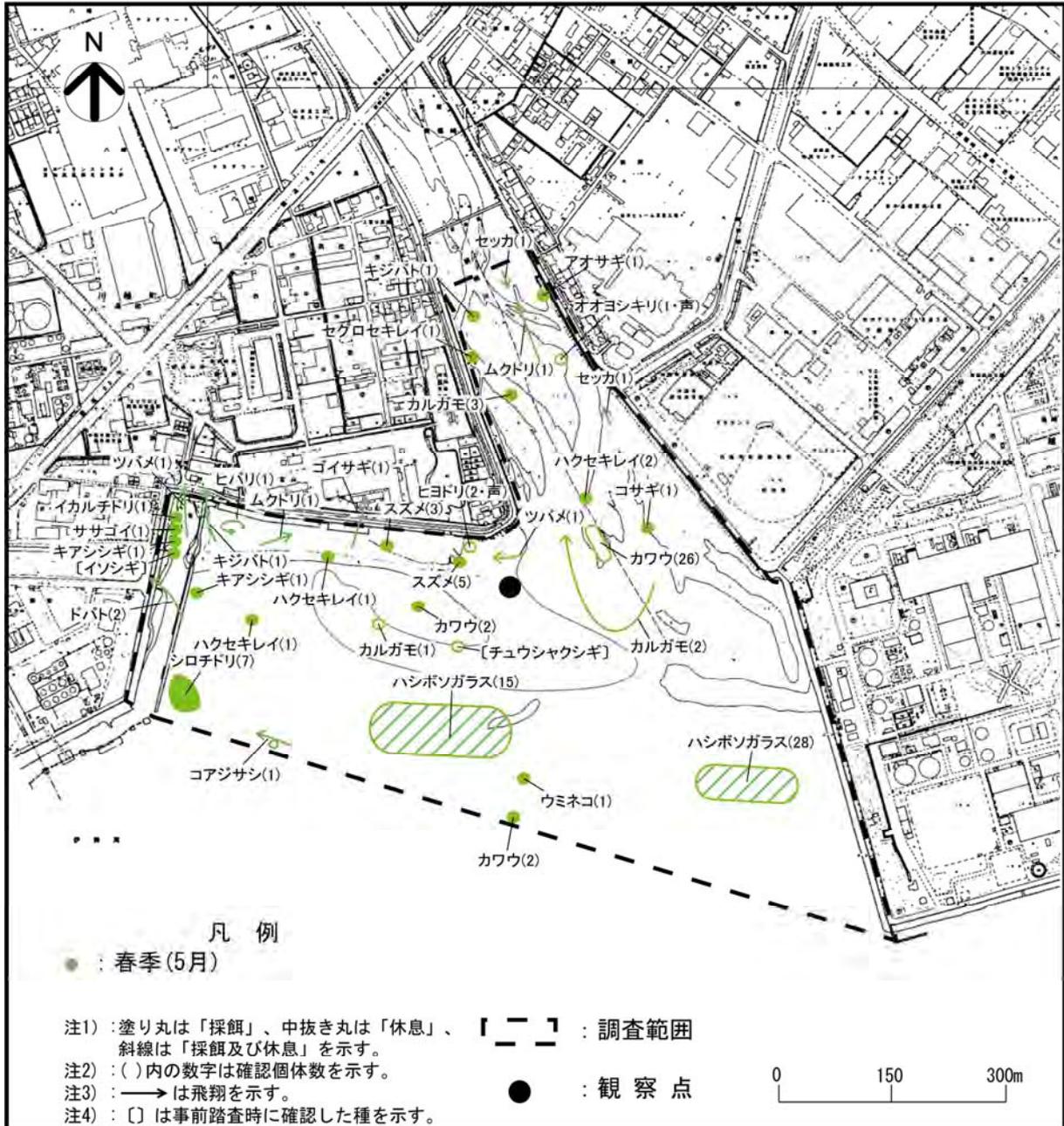


図 2-3-1 春季鳥類確認位置

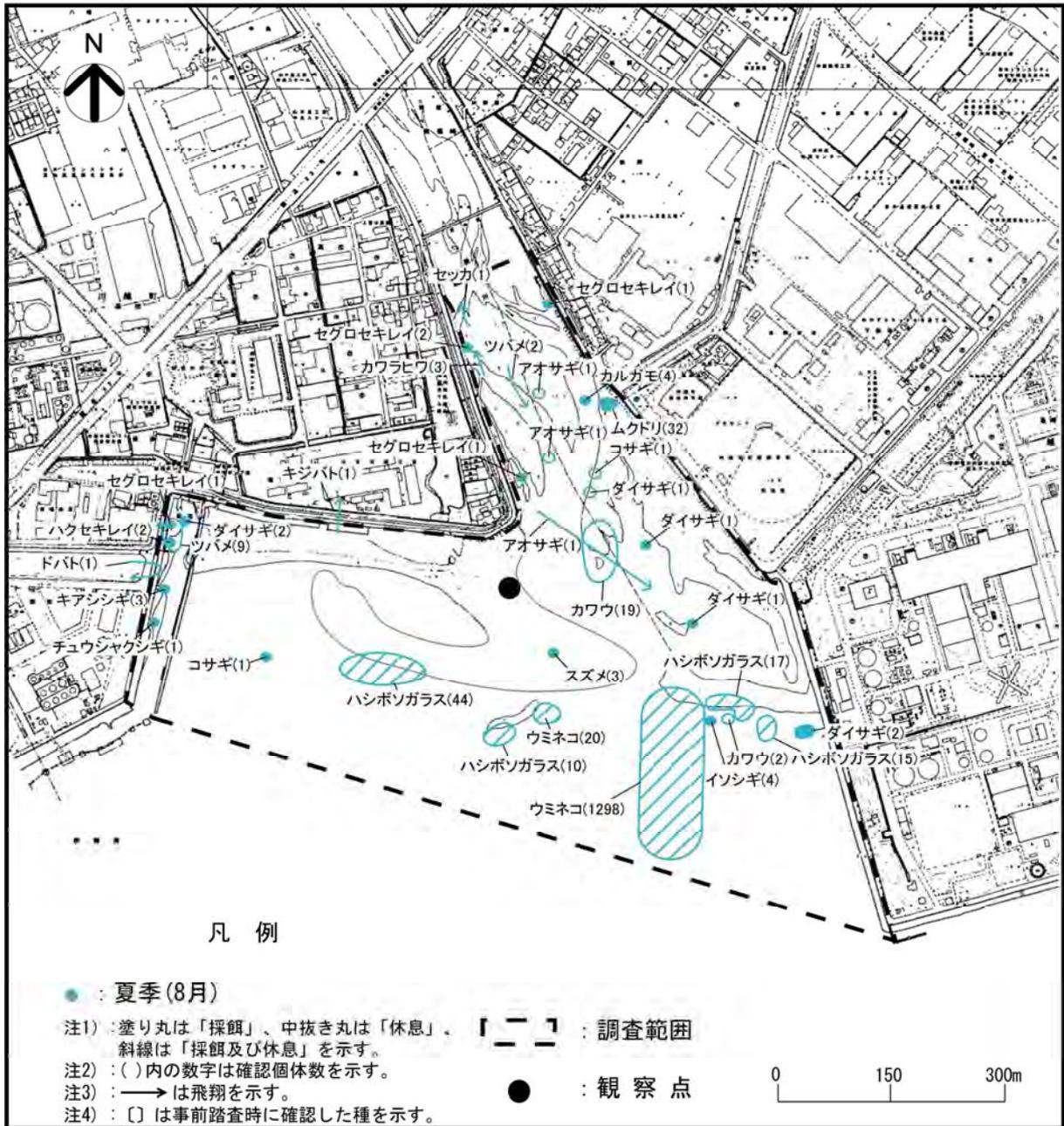


図 2-3-2 夏季鳥類確認位置

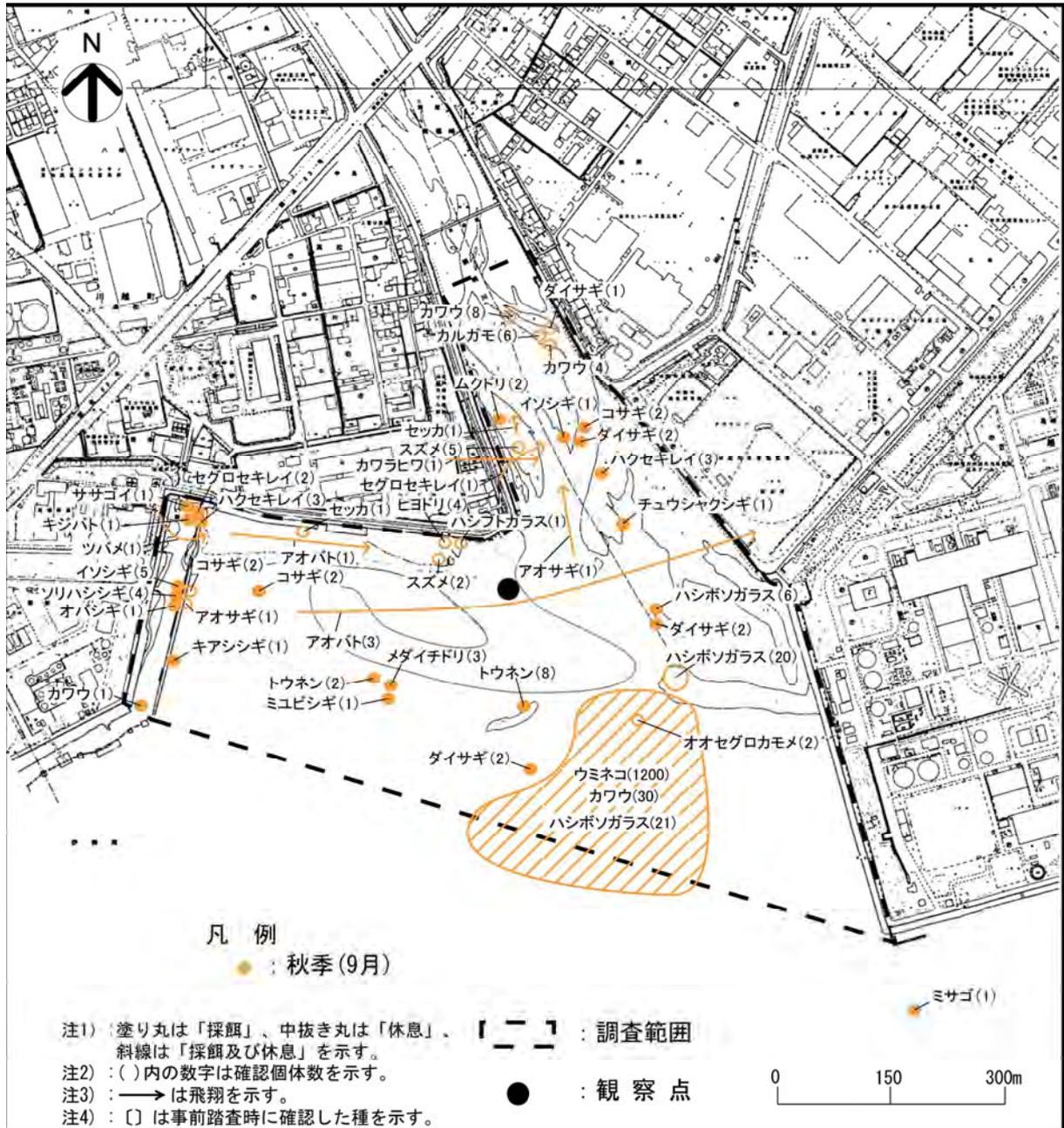


図 2-3-3 秋季鳥類確認位置



図 2-3-4 冬季鳥類確認位置

3-1 出現状況

目別の種数及び個体数の集計結果を表 2-3-2、季節変化を図 2-3-5 に示す。

季別の種数及び個体数は、春季が 25 種 123 個体、夏季 19 種 1,508 個体、秋季 29 種 1,374 個体及び冬季 37 種 1,489 個体が確認され、種数は冬季、個体数は夏季が最多となった。

目に着目すると、種数については、各季節ともスズメ目が 9~14 種と最多であった。季節別に見ると冬季にカモ目(8 種)、秋季にチドリ目シギ科(7 種)が多い傾向となっていた。個体数では、春季にはスズメ目が最多であったが、夏季、秋季及び冬季ではチドリ目カモメ科が最多であった。

なお、種数の多いスズメ目は、セキレイ類とハシボソガラスを除き、多くの種が調査範囲の一部に存在するヨシ原や草地、樹林地、上空のみで確認された。

表 2-3-2 鳥類の目別種数及び個体数

目名等	春季		夏季		秋季		冬季		合計	
	種数	個体数	種数	個体数	種数	個体数	種数	個体数	種数	個体数
カイツブリ目	0	0	0	0	0	0	1	1	1	1
ペリカン目	1	29	1	21	1	43	1	2	1	95
コウノトリ目	4	4	3	12	4	16	3	6	5	38
カモ目	1	6	1	4	1	6	8	278	8	294
タカ目	0	0	0	0	1	1	2	3	2	4
チドリ目チドリ科	2	8	0	0	1	3	1	2	3	13
チドリ目シギ科	3	2	3	8	7	24	1	5	7	39
チドリ目カモメ科	2	2	1	1,318	2	1,202	5	1,123	6	3,645
ハト目	1	2	1	1	2	5	1	2	3	10
スズメ目	11	70	9	144	10	74	14	67	19	355
合計	25	123	19	1,508	29	1,374	37	1,489	55	4,494

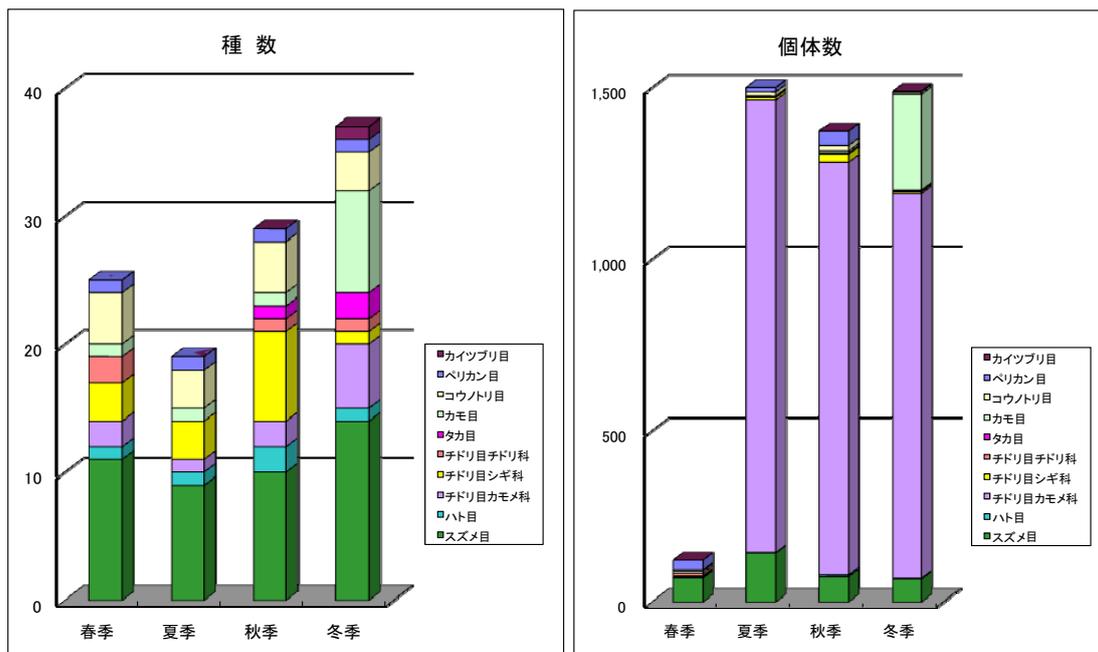


図 2-3-5 鳥類の目別種数及び個体数の季節変化

3-2 干潟部利用状況

干潟を利用する鳥類として、水辺に生息するカイツブリ目、ペリカン目、コウノトリ目、カモ目、チドリ目、スズメ目セキレイ科の種のほか、魚食性の猛禽類であるミサゴ、干潟を利用する多数のハシボソガラスが確認された。これらの種の干潟利用域を明らかにするため、食性に着目したグルーピングを行い、表 2-3-3 に示す 8 つのグループに区分した。

各グループの出現状況を次ページ以降に整理した。

表 2-3-3 干潟を利用する鳥類のグループ区分

No.	構成種等	主な食性	現地確認種
1	カイツブリ、カワウ、ミサゴ、コアジサシ	潜水や空中からのダイビングにより、主に魚を食べる。	・カイツブリ ・カワウ ・ミサゴ ・コアジサシ
2	サギ類	浅瀬で主に魚を食べる。昆虫、エビ、カニ等広範。	・ゴイサギ ・ササゴイ ・ダイサギ ・コサギ ・アオサギ
3	陸ガモ類	主に水草や藻、草の実や葉等。その他に水生昆虫、貝やエビ等。	・マガモ ・カルガモ ・コガモ ・ヒドリガモ ・オナガガモ ・ハシビロガモ
4	海ガモ類	潜水して貝類やカニ、水生昆虫、小魚、水草や藻など。	・ホシハジロ ・キンクロハジロ
5	シギ・チドリ類	ゴカイ、貝、カニ、水生昆虫等干潟の小動物を食べる。	・イカルチドリ ・シロチドリ ・メダイチドリ ・トウネン ・オバシギ ・ミユビシギ ・キアシシギ ・イソシギ ・ソリハシシギ ・チュウシャクシギ
6	カモメ類	魚類、カニ、エビ、貝、ゴカイ、草の実や海藻、死体等さまざまなものを食べる。	・ユリカモメ ・セグロカモメ ・オオセグロカモメ ・カモメ ・ウミネコ
7	セキレイ類	カゲロウ、ハエ、ガ等の昆虫類やクモ、イトミミズ等。	・ハクセキレイ ・セグロセキレイ
8	ハシボソガラス	雑食。草木の実や昆虫類などの小動物等。	・ハシボソガラス

(1) カイツブリ、カワウ、ミサゴ、コアジサシ

カイツブリは西側水路で採食していた。

カワウは特に春季から冬季に個体数が多かった。干潟の沖側や朝明川の水深のある場所では採食、干潟上では休息していた。

ミサゴが干潟上空を飛翔する様子や、沖の人工物にとまり、魚を採食している様子を確認した。

コアジサシは沖側のやや水深のある場所で採餌していた。

表 2-3-4 カイツブリ、カワウ、ミサゴ、アジサシの季節別出現状況

種名	渡り区分	平成22年			平成23年	合計
		春季(5月)	夏季(8月)	秋季(9月)	冬季(1月)	
カイツブリ	留鳥				1	1
カワウ	留鳥	29	21	43	2	95
ミサゴ	留鳥			1	2	3
コアジサシ	夏鳥	1				1
合計		30	21	44	5	100



図 2-3-6 カイツブリ、カワウ、ミサゴ及びコアジサシの干潟利用状況

(2) サギ類

ゴイサギは上空を飛翔する個体を確認した。

ササゴイは春と秋に確認され、西側水路で採食していた。秋に確認された個体は幼鳥だった。

コサギ及びアオサギが四季を通じて確認され、ダイサギは夏季と秋季に多数確認された。ダイサギ、コサギ、アオサギは、干潟や朝明川の中州、西側水路で採食及び休息する様子を確認した。調査範囲内に広く分布していた。

表 2-3-5 サギ類の季節別出現状況

種名	渡り区分	平成22年			平成23年	合計
		春季(5月)	夏季(8月)	秋季(9月)	冬季(1月)	
ゴイサギ	留鳥	1				
ササゴイ	夏鳥	1		1		2
ダイサギ	留鳥		7	7	1	15
コサギ	留鳥	1	2	6	4	13
アオサギ	留鳥	1	3	2	1	7
合計		3	12	16	6	37

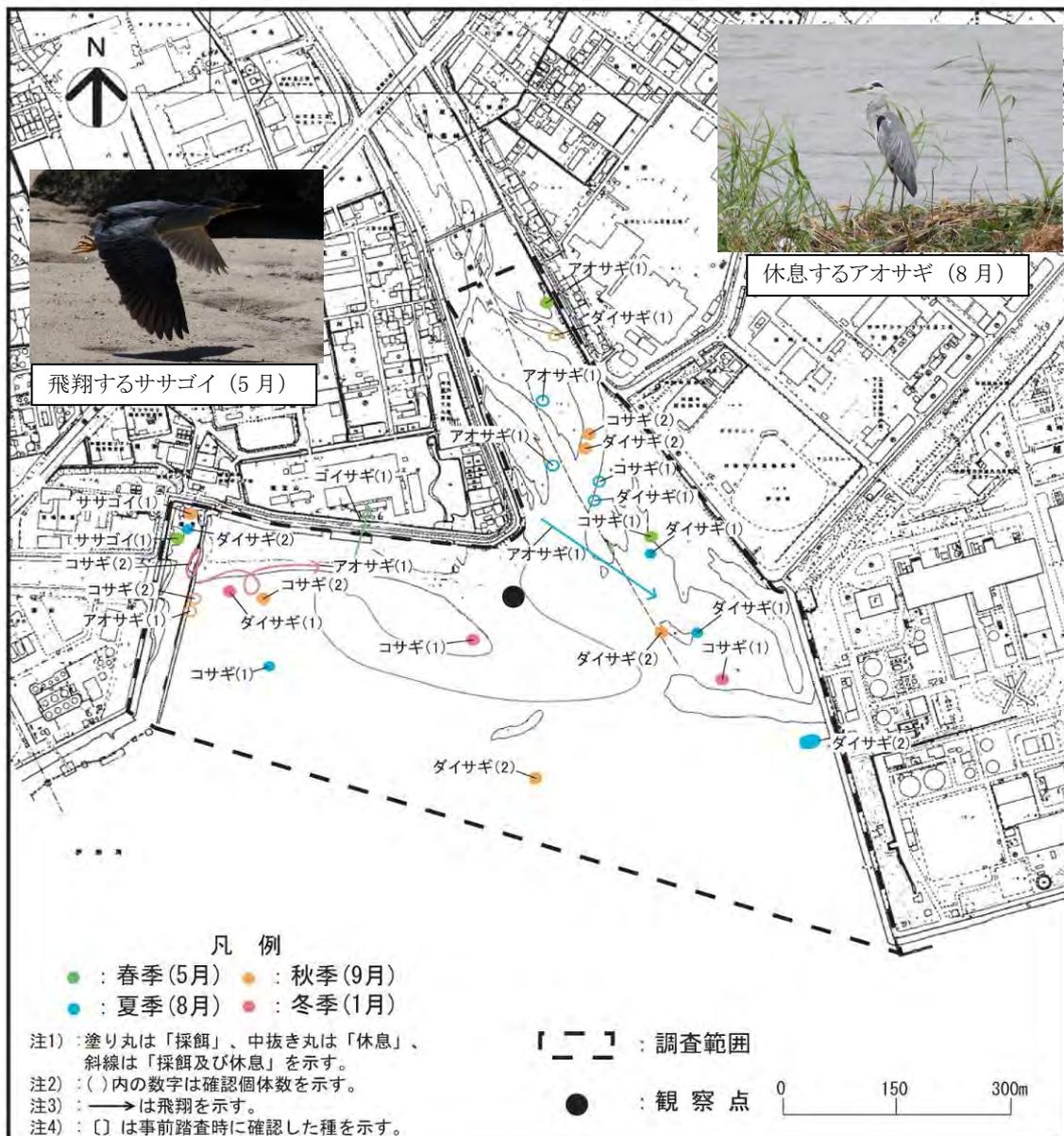


図 2-3-7 サギ類の干潟利用状況

(3) 陸ガモ類

陸ガモ類は、カルガモが四季を通じて確認され、その他の種は冬季にのみ確認された。

冬季の河口部の干潟から沖の海上では、マガモ、カルガモ、オナガガモの群れが採食する様子が確認された。カルガモは朝明川でも採食や休息していた。コガモ、ヒドリガモ、ハシビロガモは西側水路部で採食・休息するのが確認された。

表 2-3-6 陸ガモ類の季節別出現状況

種名	渡り区分	平成22年			平成23年	合計
		春季(5月)	夏季(8月)	秋季(9月)	冬季(1月)	
マガモ	冬鳥				17	17
カルガモ	留鳥	6	4	6	69	85
コガモ	冬鳥				52	52
ヒドリガモ	冬鳥				37	37
オナガガモ	冬鳥				69	69
ハシビロガモ	冬鳥				8	8
合計		6	4	6	252	268

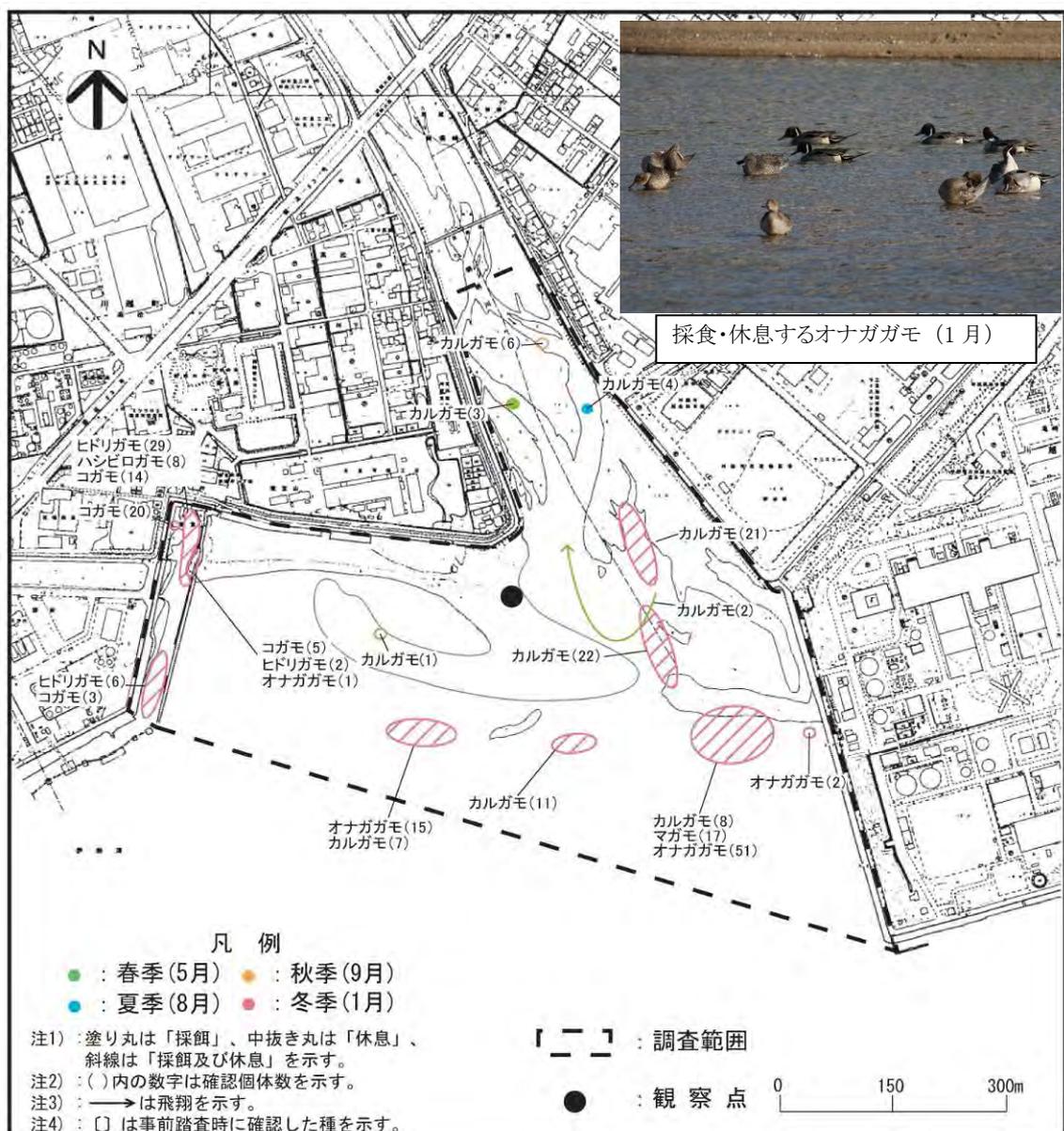


図 2-3-8 陸ガモ類の干潟利用状況

(4)海ガモ類

海ガモ類は、ホシハジロとキンクロハジロの2種が冬季にのみ確認された。

西側水路部でまとまって確認され、採食や休息をしていた。

表 2-3-7 海ガモ類の季節別出現状況

種名	渡り区分	平成22年			平成23年	合計
		春季(5月)	夏季(8月)	秋季(9月)	冬季(1月)	
ホシハジロ	冬鳥				20	20
キンクロハジロ	冬鳥				6	6
合計		0	0	0	26	26

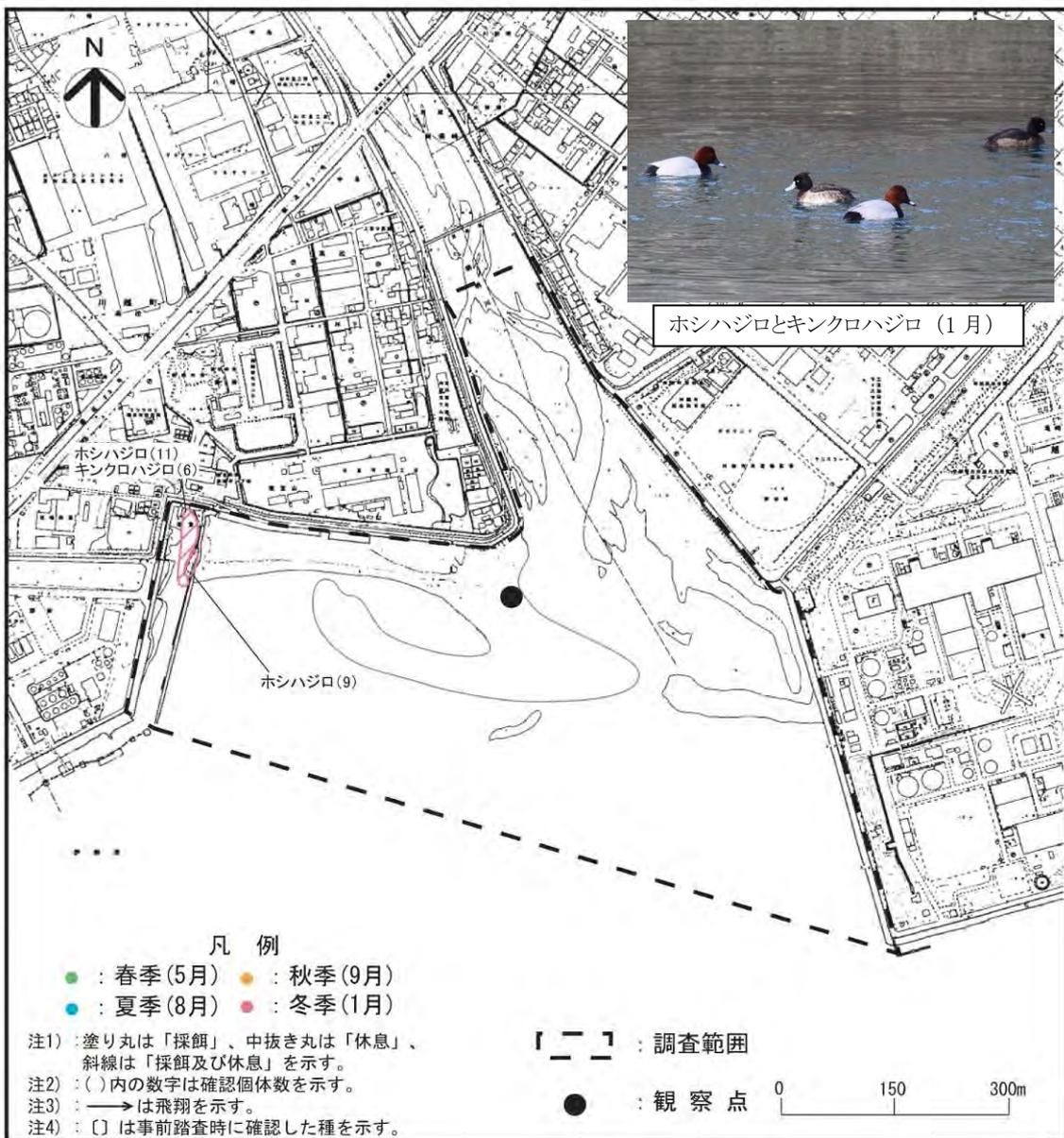


図 2-3-9 海ガモ類の干潟利用状況

(5) シギ・チドリ類

イカルチドリは春季と冬季に、イソシギは四季を通じて確認された。キアシシギとチュウシャクシギは春季から秋季に、シロチドリは春季のみ、それ以外の旅鳥及びミユビシギは秋季にのみ確認された。

シギ・チドリ類は、主に西側水路部、干潟、朝明川の中州で採食していた。イカルチドリとイソシギは朝明川でも確認されたが、その他の種は西側水路部か干潟で確認された。

表 2-3-8 シギ・チドリ類の季節別出現状況

種名	渡り区分	平成22年			平成23年	合計
		春季(5月)	夏季(8月)	秋季(9月)	冬季(1月)	
イカルチドリ	留鳥	1			2	3
シロチドリ	留鳥	7				7
メダイチドリ	旅鳥			3		3
トウネン	旅鳥			10		10
オバシギ	旅鳥			1		1
ミユビシギ	冬鳥			1		1
キアシシギ	旅鳥	2	3	1		6
イソシギ	留鳥	○*	4	6	5	15
ソリハシシギ	旅鳥			4		4
チュウシャクシギ	旅鳥	○*	1	1		2
合計		9	8	27	5	49

*は調査では確認できなかったが、5月18日の現地の事前踏査時に確認した種を示す。

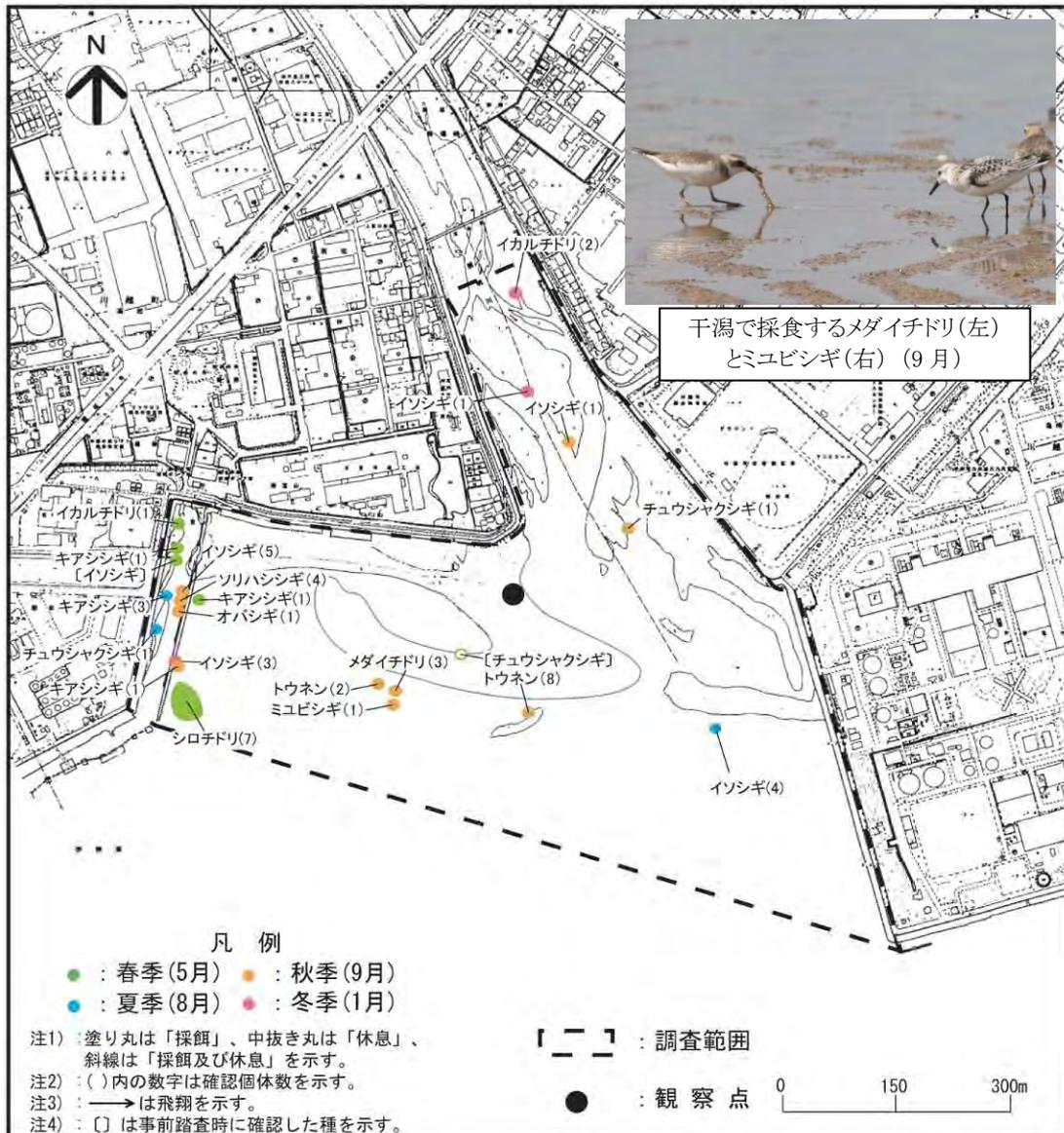


図 2-3-10 シギ・チドリ類の干潟利用状況

(6) カモメ類

留鳥であるウミネコが四季を通じて確認され、個体数は夏季と秋季に多く、春季と冬季には少なかった。

ユリカモメ、セグロカモメ、カモメが冬季に確認され、特にユリカモメの個体数が多かった。オオセグロカモメが秋季から冬季に確認された。

沖に面した干潟先端部等で多くの個体が採食や休息する様子が確認された。

表 2-3-9 カモメ類の季節別出現状況

種名	渡り区分	平成22年			平成23年	合計
		春季(5月)	夏季(8月)	秋季(9月)	冬季(1月)	
ユリカモメ	冬鳥				1009	1009
セグロカモメ	冬鳥				14	14
オオセグロカモメ	冬鳥			2	2	4
カモメ	冬鳥				91	91
ウミネコ	留鳥	1	1318	1200	7	2526
合計		1	1318	1202	1123	3644



図 2-3-11 カモメ類の干潟利用状況

(7)セキレイ類

セキレイ類は、ハクセキレイが四季を通じて確認され、セグロセキレイが春季～秋季に確認された。

両種とも、干潟や草地、西側水路部、朝明川の中州において、1～2 個体が水際を移動しつつ採食する様子が確認された。

表 2-3-10 セキレイ類の季節別出現状況

種名	渡り区分	平成22年			平成23年	合計
		春季(5月)	夏季(8月)	秋季(9月)	冬季(1月)	
ハクセキレイ	留鳥	4	4	6	4	18
セグロセキレイ	留鳥	1	3	3		7
合計		5	7	9	4	25

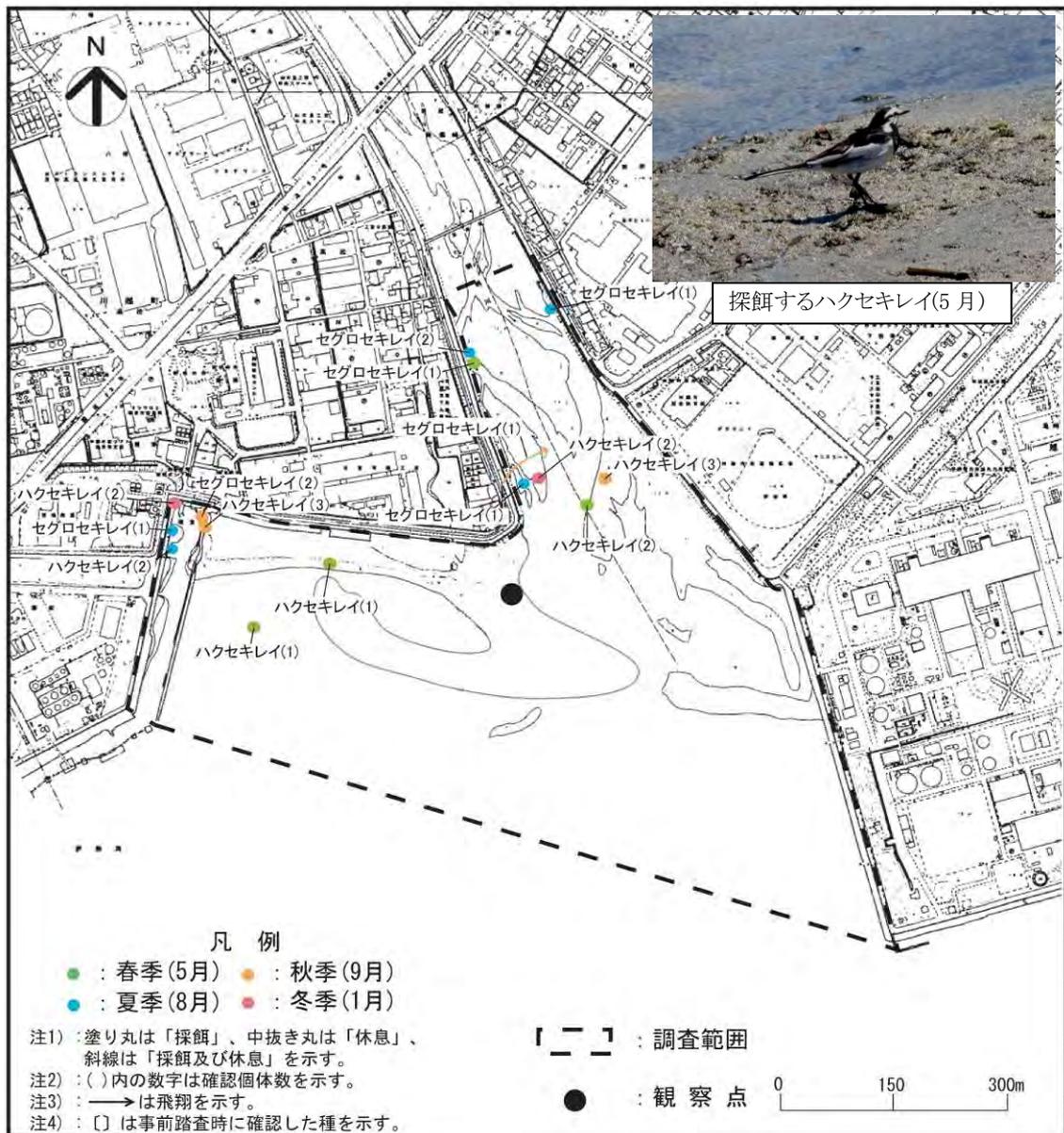


図 2-3-12 セキレイ類の干潟利用状況

(8) ハシボソガラス

ハシボソガラスは、四季を通じて確認され、特に春～秋に多かった。

ほとんどの個体が干潟に降り、潮干狩りで掘り起こされた場所で採食したり、干潟から多毛類を採食する様子を確認した。

表 2-3-11 ハシボソガラスの季節別出現状況

種名	渡り区分	平成22年			平成23年	合計
		春季(5月)	夏季(8月)	秋季(9月)	冬季(1月)	
ハシボソガラス	留鳥	43	86	47	15	191
合計		43	86	47	15	191

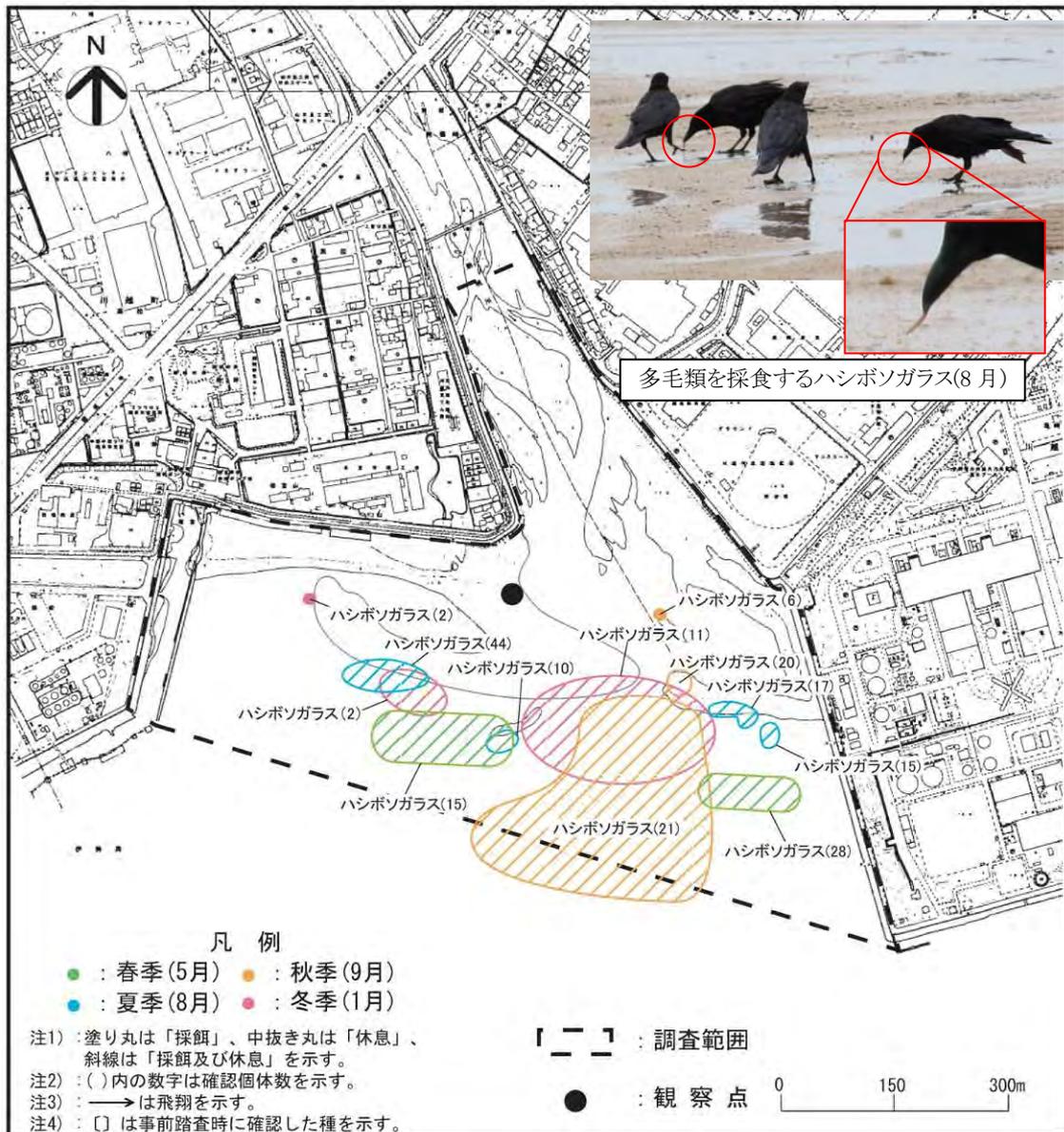


図 2-3-13 ハシボソガラスの干潟利用状況

3-3 繁殖状況

繁殖に係る行動は確認されなかったが、秋季調査で、貴重種のササゴイの幼鳥を確認した。



ササゴイ幼鳥 (9月)

また、冬季調査では、干潟上部の落葉樹で使用されていない巣 (種不明) を 2 巣確認した。

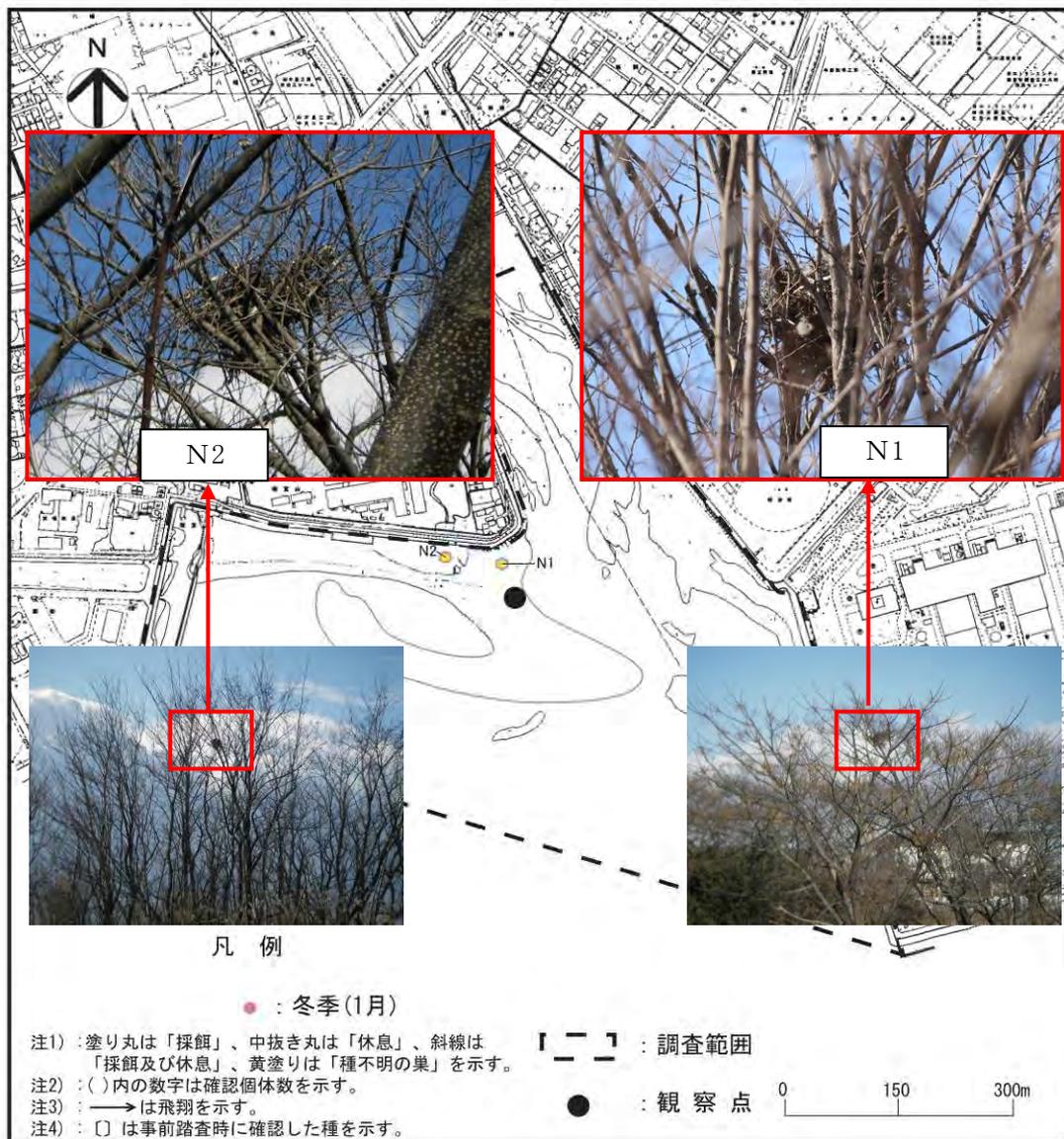


図 2-3-14 冬季調査で確認した巣 (種不明) の位置

3-4 重要種生息状況

環境省及び三重県選定の重要種として、ササゴイ、ミサゴ、イカルチドリ、シロチドリ、ミユビシギ、コアジサシ及びオオヨシキリの7種が確認された。

これらの確認状況及び選定基準等を表 2-3-12、干潟利用状況を図 2-3-11、重要種の生態等を 2-43～2-47 ページに示す。

<干出した干潟部>

干潟部の水際では、シロチドリが春季に、ミユビシギが秋季に採食するのが確認された。沖側では、コアジサシやミサゴの探餌飛翔が確認された。

<西側の水路付近>

水際では、ササゴイが春季と秋季に、イカルチドリとシロチドリが春季に採食するのが確認された。

<朝明川河川域>

ヨシ帯では春季にオオヨシキリの囀りが確認された。水際には冬季にイカルチドリの採食が確認された。

表 2-3-12 鳥類の重要種確認状況

No.	種名	貴重種選定基準			渡り区分	平成22年				確認状況
		環境省RL	三重県RDB	近畿地区RDB		春季(5月)	夏季(8月)	秋季(9月)	冬季(1月)	
1	ササゴイ (サギ科)		絶滅危惧II類(VU) [繁殖]	準絶滅危惧	夏鳥	●		●		西側水路の水際において、春季及び秋季に採餌中の個体が各1個体確認された。秋季に確認された個体は幼鳥だった。
2	ミサゴ (タカ科)	準絶滅危惧 (NT)	絶滅危惧IB類(EN) [繁殖] 絶滅危惧II類(VU) [越冬]	絶滅危惧	留鳥			●	●	秋季には、1個体が干潟部沖側の鉄塔にとまり、採食していた。冬季は上空を探餌飛行する2個体が確認された。
3	イカルチドリ (チドリ科)		絶滅危惧II類(VU) [繁殖]	準絶滅危惧	留鳥	●			●	春季は西側水路部で採食する1個体が確認された。冬季には朝明川の中州で、採食する2個体が確認された。
4	シロチドリ (チドリ科)		絶滅危惧IB類(EN) [繁殖] 準絶滅危惧(NT) [越冬]	準絶滅危惧	留鳥	●				春季に干潟部水際で採食する7個体が確認された。
5	ミユビシギ (シギ科)		準絶滅危惧(NT) [繁殖]	準絶滅危惧	冬鳥			●		秋季に干潟部水際で、採食する1個体が確認された。
6	コアジサシ (カモメ科)	絶滅危惧II類 (VU)	絶滅危惧IB類(EN) [繁殖]	絶滅危惧	夏鳥	●				春季に干潟部沖側の上空を飛翔する1個体が確認された。
7	オオヨシキリ (ウグイス科)		準絶滅危惧(NT) [繁殖]	準絶滅危惧	夏鳥	●				春季に、朝明川河川域の水際のヨシ帯において、囀る1個体を確認した。

注1) 種名及び配列は「日本鳥類目録改定第6版」(2000年、日本鳥学会)に準拠した。

注2) 渡り区分は、一般生態の他、現地調査時の状況により区分した。

注3) 「環境省RL」及び「三重県RDB」は、「環境省レッドリスト 鳥類」(環境省、2006年)<<http://www.env.go.jp/press/press.php?serial=7849>>及び「三重県レッドデータブック 2005 動物」(三重県、2006年)を示す。

- 絶滅 : 我が国(三重県)ではすでに絶滅したと考えられる種。
- 野生絶滅 : 飼育・栽培下でのみ存続している種。
- 絶滅危惧 I A類 : 絶滅の危機に瀕している種で、ごく近い将来における野生での絶滅の危険性が極めて高いもの。
- 絶滅危惧 I B類 : 絶滅の危機に瀕している種で、IA類ほどではないが、近い将来における野生での絶滅の危険性が高いもの。
- 絶滅危惧 II類 : 絶滅の危険が増大している種。
- 準絶滅危惧 : 存続基盤が脆弱な種。
- 情報不足 : 評価するだけの情報が不足している種。



イカルチドリ(1月)
絶滅危惧Ⅱ類[繁殖]



シロチドリ (5月)
絶滅危惧 I B[繁殖]
準絶滅危惧[越冬]

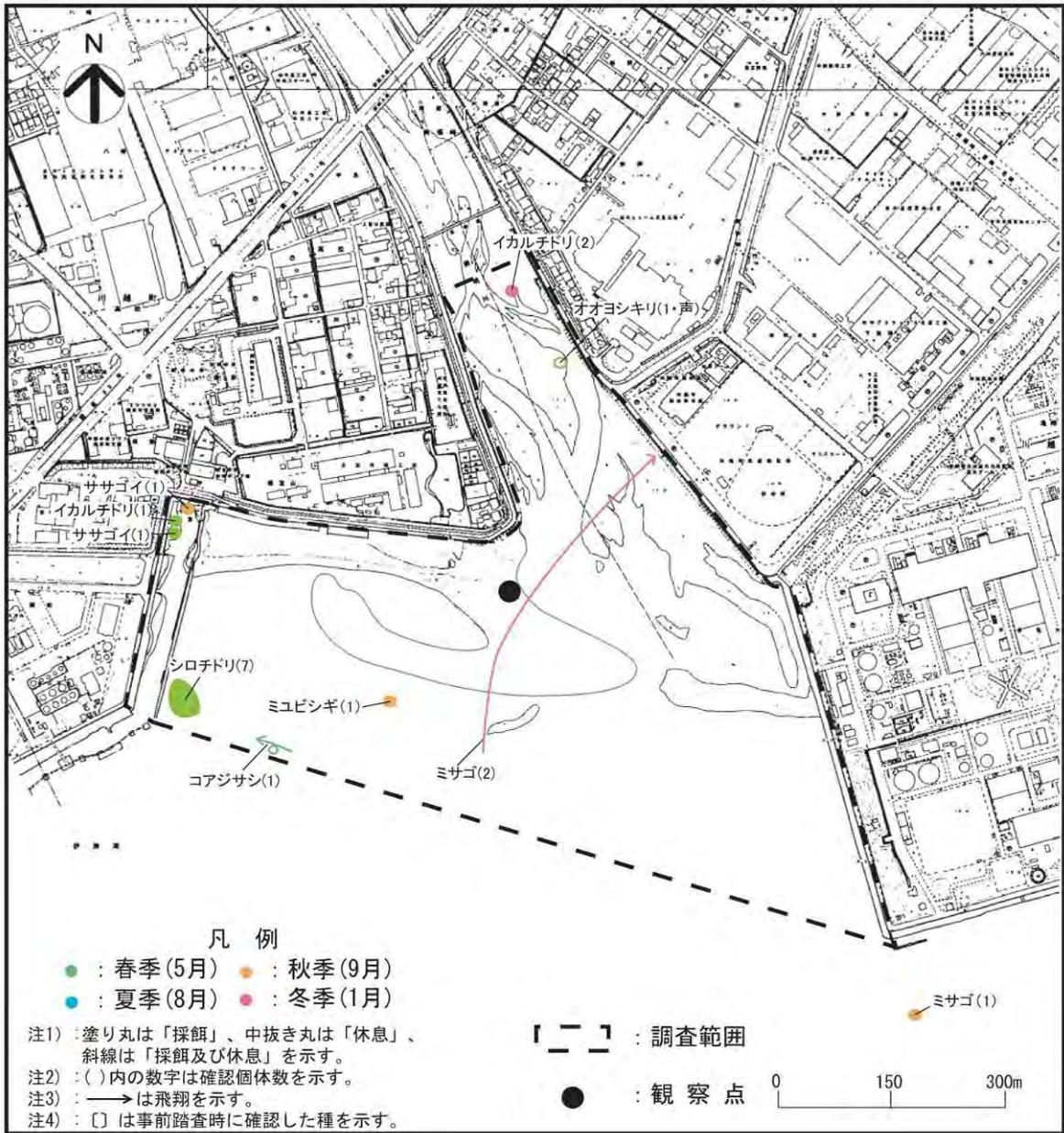


図 2-3-15 鳥類重要種の確認位置図

重要な種の生態等(1)

ササゴイ

Butorides striatus

三重県：絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 国：－ 近畿：NT (繁殖個体群)

コウノトリ目 サギ科

選定理由

既知の生息地点数が10以下、出現範囲が400 km²以下、開発圧力がある。

種の概要

夏鳥。全長約52 cm。成鳥は頭上が黒色。背と翼の上面は青緑色の光沢のある黒褐色で、下面は淡い紫灰色。大木や比較的高い樹林に小集団で営巣する。

分布

熱帯から、温帯にかけて広く分布。国内では、本州、四国、九州で繁殖し、東南アジアで越冬する。九州南部では少数が越冬する。

現況・減少要因

県内では、松阪市、伊勢市などの大木のある社寺林数か所で繁殖している。減少要因は、圃場整備や川や水路の改修による魚類、水生生物の激減、また、ブラックバスやブルーギルの違法・密放流で、おもな餌である小型の在来魚が激減した影響や、カラスによる繁殖妨害の影響が大きい。

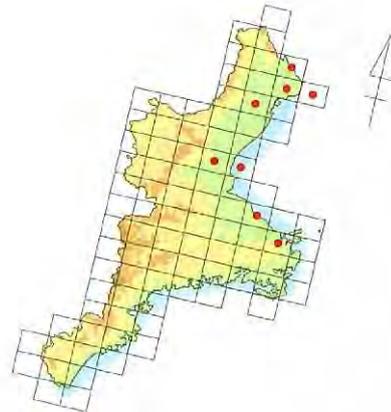
保護対策

集団営巣できる大木や樹林の保護およびカラスの個体数調整。河川工事は近自然工法で行い、「環境保全を重視する農林水産業への移行」政策に基づく農地の改良を実施し、魚類や水生生物が豊富な環境を復元することが必要である。

(武田恵世)



ササゴイ 鈴鹿市 2005年5月 市川雄二撮影



ミサゴ

Pandion haliaetus

三重県：絶滅危惧ⅠB類 (EN) (繁殖個体群), 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) (越冬個体群) 国：NT 近畿：絶滅危惧種 (繁殖個体群)

タカ目 タカ科

選定理由

繁殖期の既知の生息地点数は5以下、個体数は50未満。越冬期には広い範囲にみられるが、250未満の個体数しかいないと考えられる。

種の概要

おもに留鳥、冬期には越冬個体加わる。体長54~64 cm、翼開長155~175 cm、翼は細長く、尾は短い。頭部は白く過眼線が黒く、体の上面は黒褐色、下面は白く、胸に黒褐色の帯。雌雄同色。餌はおもに大型の魚類、海岸の孤立した岩の上や樹上などで営巣する。

分布

極地を除く全世界に分布。国内では、北海道から沖縄で少数繁殖し、冬期には北のものは南に移動する。

現況・減少要因

志摩半島以南で少数が繁殖し、冬期には、川越町から尾鷲市の海岸線で確認されている。また、伊賀市の高山ダム湖など内陸部でもごく少数越冬している。減少要因は、魚類の減少、魚類を介した有害物質の体内蓄積や営巣可能な大木の減少などが考えられる。

保護対策

海洋資源の持続的活用を進め、魚介類の減少を防止するとともに有害物質による環境汚染を防止し、環境からの有害物質の回収を計る必要がある。また、営巣木となる大木を保護、育成する必要がある。

文献

6, 14, 21, 32, 34.

(武田恵世)



ミサゴ 松阪市 2006年1月 大矢正雄撮影



重要な種の生態等(2)

イカルチドリ 三重県：絶滅危惧Ⅱ類 (VU) (繁殖個体群), 準絶滅危惧 (NT) (越冬個体群) 国：一 近畿：NT (繁殖個体群)
Charadrius placidus チドリ目 チドリ科

選定理由

県内では比較的多く確認されているが、生息および繁殖に適した河原が減少している。

種の概要

留鳥。体長 20.5 cm。上面はうすい茶褐色で下面は白い、近縁のコチドリに似ているが、少し大きく目のまわりのリングが細い。おもな餌は水生生物である。河川の中流から上流の中洲や河原の砂礫地に営巣する。下流では少ない。

分 布

ウスリー地方、中国東北地区、朝鮮半島などに分布。中国南部からミャンマーにかけて越冬する。国内では本州、四国、九州などで繁殖する。

現況・減少要因

県内では、いなべ市、四日市市、鈴鹿市、伊賀市、名張市、松阪市、伊勢市、紀北町、紀宝町など各地の広い河原に少数生息している。冬期は越冬個体加わる。減少要因は広い河原や餌となる水生生物などの減少。また、営巣場所への人の立入りによる繁殖阻害などである。

保護対策

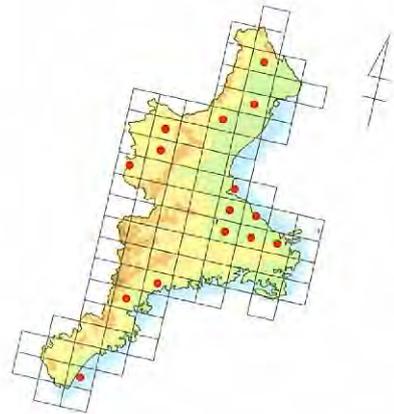
井堰などを上砂が流れ出る構造に改修し、広い河原を確保する。また、営巣場所への人の立入りを制限することも必要である。

文 献

7. 29. (市川雄二・中井節二)



イカルチドリ 鈴鹿市 2005年8月 林益夫撮影



シロチドリ 三重県：絶滅危惧ⅠB類 (EN) (繁殖個体群), 準絶滅危惧 (NT) (越冬個体群) 国：一 近畿：NT (繁殖個体群)
Charadrius alexandrinus チドリ目 チドリ科

選定理由

海岸線に広く分布するが、海浜開発等により営巣環境の悪化が著しい。

種の概要

留鳥。体長 17.5 cm。スズメより少し大きい。胸には正面でつながっていない黒帯がある。頭と体の上面は灰褐色、体の下面は白く、足は黒い。ゴカイや小昆虫、クモ類などを食べる。

分 布

全北区で不連続に繁殖分布し、冬期はアフリカ、インド、メキシコなどに渡る。国内では九州以北で繁殖する。県内では、海岸部に広く分布。

現況・減少要因

北勢地方や中勢地方の海岸の砂浜で繁殖している。七里御浜の海岸では最近の繁殖記録はない。冬期には、伊勢湾、熊野灘沿岸の海岸や干潟などで見られる。減少要因は、海岸浸食や開発による砂浜の減少、繁殖地への人の立入りである。

保護対策

生息、繁殖場所である砂浜の保全、海岸浸食の防止。また、繁殖シーズンには繁殖地への人の立入り制限措置が必要である。

特記事項

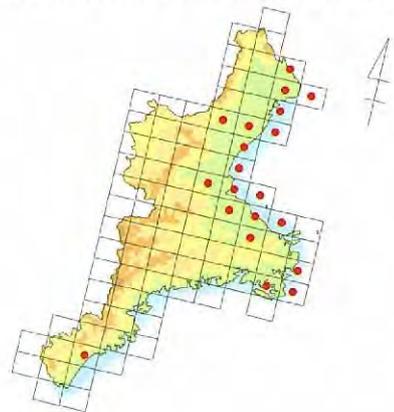
県鳥

文 献

8. 12. 13. 29. (市川雄二)



シロチドリ 津市河芸町 2005年5月 林益夫撮影



重要な種の生態等(3)

ミユビシギ

Crocethia alba

三重県：準絶滅危惧 (NT) 国：— 近畿：絶滅危惧種 (通過個体群)

チドリ目 シギ科

選定理由

既知の渡来地点数は10以下、生息環境は悪化している。

種の概要

旅鳥または冬鳥。体長19 cm。ハマシギと同じ大きさのシギ。「クリーツ」と鳴く。主に砂質の海岸に見られる。波打際でハマトビムシやカニなどの小動物を食べる。

分 布

北極圏のツンドラで局所的に繁殖し、ヨーロッパ中南部、アフリカ、インド、東南アジア、オーストラリア、北アメリカ大陸中部以南、南アメリカ大陸などに渡る。国内には、旅鳥または冬鳥としてほぼ全国的に渡来する。

現況・減少要因

県内では、川越町、四日市市、津市、松阪市などで記録されている。津市の海岸には、近年、数十～300羽が渡来し、2005年の冬期には100羽近くが越冬していた。開発や浸食による砂浜海岸の消失が減少要因となる。

保護対策

砂質の砂浜海岸の保全が必要である。

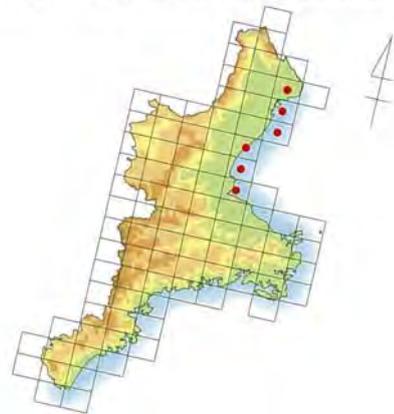
文 献

23.

(杉浦邦彦・中井節二)



ミユビシギ 津市 1989年10月 前澤昭彦撮影



出典：「三重県レッドデータブック 2005 動物」(三重県、2005年)

重要な種の生態等(4)

コアジサシ

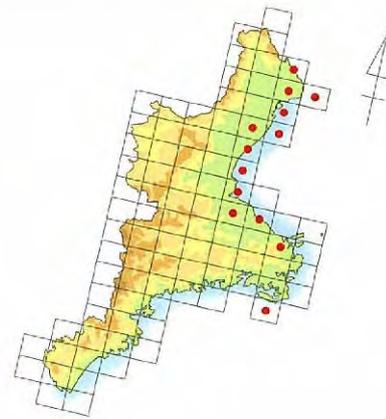
Sterna albifrons sinensis

三重県：絶滅危惧IB類 (EN) 国：VU 近畿：絶滅危惧種 (繁殖個体群)

チドリ目 カモメ科



コアジサシ 四日市市楠町 2005年5月 林益夫撮影



選定理由

既知の生息地点数は10程度であるが、自然状態の繁殖環境がほとんど失われている。

種の概要

夏鳥。全長約28cmの小形のアジサシ。体の上面は青灰色で、下面は白色、嘴が黄色で先端が黒い。脚は橙黄色。体が細長く、ツバメのように翼が尖っており、尾羽が二股になっている。夏羽では額が白く、頭上から後頭にかけて黒い。冬羽では、額の白色部が頭頂まで広がり、嘴が黒く、脚が黒か褐色となる。飛びながら、「キリッ キリッ キー キー」と鳴く。餌は小型の魚類で、空中から狙いを付けて水中に飛び込み捕獲し、アジサシの名前の由来となっている。広い河原や砂浜などの裸地に集団で営巣し、集団で防衛する。卵とヒナは、砂礫に似た模様がある保護色である。繁殖成功率が高いのは、およそ3ha以上で植被率約30%以下の裸地に、約500羽以上が集まった場合である。

分布

種コアジサシは、ユーラシアから北アメリカの中緯度地帯で繁殖し、ユーラシア南部、オーストラリア、アフリカ、南アメリカで越冬する。極東の亜種コアジサシは、日本と中国東部、南部で繁殖し、東南アジアからニュージーランドで越冬する。国内では、本州の東北地方南部以南に渡来し、繁殖する。県内では、桑名市桑名・長島町、四日市市、亀山市、津市、松阪市松阪・三雲、伊勢市、志摩市で記録がある。

現況・減少要因

約30年前は全国的にも普通に見られる鳥とされていたが、自然状態の場所で繁殖に成功した最近の例は四日市市の吉崎海岸、志摩市和具大島などしかなく、非常に少なくなっている。一方、近年は四日市市や桑名市などの工事の埋立地や裸地で営巣することが多い。減少要因は、ダムや井堰による河川の土砂流下阻害による河原の減少や海岸侵食により、広い砂礫地が激減したことである。

保護対策

現在残されている広い河原や砂浜をこれ以上破壊しないこと。海岸侵食の防止は特に重要であり、河口や沿岸の砂州は可能な限り残す対策が必要である。広い河原や砂浜を復元するには、ダムや井堰の撤去か、土砂流下可能なものに改造するしかないと考えられる。コアジサシやシロチドリなどが営巣する河原や砂浜などの裸地は、川の増水や波浪で1年に数回攪乱されることで維持されている環境であり、攪乱がないと草が生え、やがて草原に移行し、営巣ができなくなる。河原の形成や砂州の形成、砂浜の形成など、小規模な自然変化は許容するような河川整備、海岸整備を進める必要がある。具体的には、河川では高水敷は造らず、井堰やダムを統合などにより減らし、また、ダムや井堰からのフラッシュ放流などでの攪乱を行うこと。海岸では、松林を過度に植林しないこと、堤防の前面にはハマゴウなどの本来の海岸植物を生育させ、高波による海岸侵食を防止する必要がある。また、川の中州や河口や沿岸の砂州は可能な限り残す必要がある。

(武田恵世)

出典：「三重県レッドデータブック 2005 動物」(三重県、2005年)

重要な種の生態等(5)

オオヨシキリ

Acrocephalus arundinaceus

三重県：準絶滅危惧（NT） 国：－ 近畿：NT（繁殖個体群）

スズメ目 ウグイス科

選定理由

既知の生息地点数は多いが、生息地の開発圧力が高い。

種の概要

夏鳥。全長 18 cm。川や溜池、休耕田などのアシ原に生息し、アシ原の中に巣をつくる。茎から茎を移動しながら、時には空中へ飛び出して昆虫類やクモ類を食べる。大きな声で「ギョギョシ ギョギョシ」と鳴く。

分 布

ユーラシア大陸と北アフリカの温帯地域で繁殖し、アフリカ、インド、東南アジアで越冬する。国内では、九州以北で繁殖する。

現況・減少要因

県内各地の広いアシ原に生息、繁殖する。減少要因は、干潟の埋立てや河川、池の開発によるアシ原の減少である。

保護対策

生息地である広い面積のアシ原の保全が大切である。また、草刈り等の管理にあたっては、繁殖期をさけることも必要である。

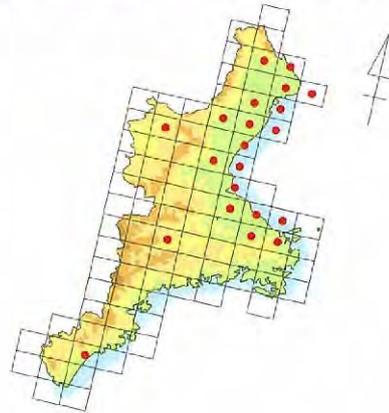
文 献

22, 23, 29.

(市川雄二・中井節二)



オオヨシキリ 松阪市三雲 2003年5月 林益夫撮影



出典：「三重県レッドデータブック 2005 動物」（三重県、2005年）